令和6年度下越美術教育研究会　冬季研修会
20250215

子どもの自己肯定感をはぐくみ、主体的・対話的で深い学び、学力向上にもつながる対話型鑑賞（朝鑑賞）

～アート・カードの活用を通して～

滋賀大学教職大学院　　青木善治

これまで、どのような
鑑賞の授業を受けてきましたか？

対話型鑑賞を授業で受けられた方は
いらっしゃいますか？

教科学習で

正解・不正解のない、

正解を求めない

学習活動はありますか？

質問コーナー

- 自分のことが好き？
（ 好き　　まあまあ好き　　あまり好きではない　　嫌い）
- 自分と一番長くつきあっていく人は誰？
- 自分の見えているものと隣の人が見えているものは同じ？

それを確かめるにはどうしたらよいか？

- 自分が聞こえているもの、感じていることは隣の人と同じ？
- コトバはとても便利だが、受け取り方は子どもたち一人一人違っている。それはなぜか？
- 他の誰よりも一番長くつきあう自分自身。そんな子どもたちの「自己肯定感」を高めていく、そのために、図画工作・美術は最適！！

現在の学校教育の課題と改善策

ともに育つ・育む！

次世代を担う子どものために まずは大人から意識改革を

　これまでの教育は、大人になってから困らないように「正解や正しいやり方を覚えておきなさい」というものでした。次の世代は先行き不透明で予測不可能なうえ、環境問題・社会問題の解決も求められます。そこに正解はなく、必要な知力・能力はこれまでと大きく異なります。

　予測不可能な未来を担う子どもたちのためにできることは、判断材料を提示するくらいです。学校で「すべきこと」ばかり与えてきた結果、自分で物事を選択する力や社会を変える力はあまり培われなかったのです。不登校、自殺者数が過去に例をみないほど増加していますが、このような社会を作ったのは大人です。

ジェンダーを含め、既成概念にとらわれることなく、学校教育はもちろん、入試制度や採用試験の内容を見直し、いつでもやり直しができる仕組み作りを行いながら、子どもの自己肯定感を高め、自分の人生を自分で考えることができるように改善し続けることが必要です。

大人が有能さを秘めた子どもたちのさらなる変容を求めるなら、学校教育や社会を含め、大人の見方や考え方を改善し続けることが大切なのです。

そのうえでもアートは最適！！　（青木善治）

現在の学校教育の課題と改善策｜ともに育つ・育む！ - ママのお出かけ応援マガジンサイト「まみたん」（mamitan.net）　より

これまでの主な経緯

令和2年度末まで新潟県の主に小学校において 33 年間勤務し，校長としては 2 カ校従事、2021年4月より滋賀大学へ

教頭職の次に 2013 年 4 月から 4 年間異動 により，新潟県教育庁文化行政課（**新潟県立近代美術館** ）において学芸員と共に美術教育の普及に従事**アート・カードを用いた鑑賞や「対話型鑑賞」の有効性を体感**し，教育現場でもっと普及させたいと思いを強くした

その効果や有効性を拙稿（2019）「教師が変容する 研修の在り方に関する一考察－対話型鑑賞研修会における教師の変容事例から－」大学美術教育学会誌論文

前任校において朝学習の時間帯を活用し，「朝鑑賞」を実践し，その効果を実感。拙稿（2021）「自己肯定感を高め，生き生きと表現する子どもの育成に関する教育実践研究」、拙稿(2022)「互いのよさや個性を認め尊重し合う子どもの育成に関する教育実践研究」大学美術教育学会誌論文や学会発表等においても対話型鑑賞の効果や可能性を校長職の際に示してきた

彦根市立平田小学校、米原小学校等にて共同研究継続中、南魚沼市や彦根市教育委員会定例校長会において、鑑賞の魅力を紹介させていただく

『教師が「教えない人」になれる時間　15分間の「朝鑑賞」が子どもの自己肯定感を育む』 2024年3月出版　東洋館出版社より

15分間の「朝鑑賞」が
子どもの自己肯定感を育む

教師が「教えない人」になれる時間

青木善治［著］

朝の15分間、「教えない人（ファシリテーター）」になってみよう

正解のない「対話型鑑賞」が、
アート思考 主体性 自己肯定感 を育む

独立行政法人国立美術館
国立アートリサーチセンター主任研究員
稲庭彩和子 氏
子どもへの新たな気づきが生まれ、多様な見方や考え方が引き出されるその具体的なプロセスが満載。

前文部科学省教科調査官
岡田京子 氏
朝の15分が楽しみ！子ども同士の関係も豊かになる心弾む朝鑑賞。

東洋館出版社

教師が「教えない人」になれる時間
15分間の「朝鑑賞」が子どもの自己肯定感を育む
青木善治［著］
東洋館出版社

ISBN978-4-491-05444-5
C3037 ¥1900E
9784491054445
定価：本体1,900円
（税込2,090円）税10%
東洋館出版社
［学級経営］
1923037019007

教師が
「教えない人」に
なれる時間

こんな先生におすすめ

- ☑ 授業中、子どもが発言したがらない
- ☑ 子どもの主体性をどう育めばいいかわからない
- ☑ 子どもの思考力や表現力、「聞く力」を高めたい
- ☑ 学級の雰囲気が悪く、トラブルが絶えない
- ☑ 子どもたちにとって居心地のよい教室をつくりたい
- ☑ 子どものよさを見取ることができているか自信がない
- ☑ 教師としてのファシリテーションスキルを高めたい

文献紹介

教師が「教えない人」になれる時間

―15分間の「朝鑑賞」が子どもの自己肯定感を育む

著　者：青木 善治
出版社：東洋館出版社（2024/3）
ISBN-13：9784491054445
定価 2,090 円（本体 1,900 円＋税 10%）

題名が気になって、この本を手に取る人も多いだろう。教師になることは「教える人」になることを意味する。だから教師でありながら「教えない人」になる時間とはいったいどういうことだろう？と思わせる。

筆者は現在の社会の中で、教師が「教える専門家」から「学びの専門家」に変容する重要性を説き、その方法と実践を詳細に述べている。その具体的な方法が「朝鑑賞」だ。「朝鑑賞」とは、美術の知識をもとにして作品と向かい合うのではなく、作品に対する自分の見方や感じ方、考えを他者と交流しながら楽しむ対話型鑑賞法」。学校の1日が始まる朝の15分間、教師はこの唯一の正解も不正解もない鑑賞の活動を通して、教える人ではなくファシリテータ（進行役、場をつくる人）になってみよう、という提案だ。この15分を月に1、2回行うだけでも、子どもと先生の関係が変わり、子ども同士の関係も変化して、学校や教室が居心地の良い場になり、学級経営や子ども主体の授業づくりの基盤にもなっていくという。朝鑑賞は時間確保の困難さもなく、評価の必要もないから、子どもたちを評価の対象としてではなく、一人一人の人間として、ありのままに見つめる時間が生まれるという。良いことづくめな秘策かも知れない「朝鑑賞」だが、本書の魅力はその具体的なプロセスがあからさまに収録されている点だ。

第1章では《今、求められている「生きるための学び」》と題して、なぜ教師が「教える専門家」から「学びの専門家」に変容する必要があるのか、「学び」とは本来どういうものであるかを今一度捉え直し、芸術が果たす教育的役割について、J．デューイやH．リードを引用しながら朝鑑賞の基盤となるものを伝えている。

第2章では「朝鑑賞」の実践手法である対話型鑑賞について説明があり、第3章ではいよいよ小学校1年生から5年生までの様々な事例が発話をベースに紹介されている。例えば、ファシリテータ役の学級担任が、ムンクの『叫び』を見せながら、質問を投げかける。① 何が見えますか？ ② どんな声や音が聞こえますか？ ③ この作品にどんな題名をつけますか？

皆で同じ作品を目の前にしていることで、子どもたちからは多様な見方や考え方が引き出される。対話型鑑賞では最初の質問として「この絵の中でどんなことが起こっていますか？」と絵の中に一歩踏み込んだ質問がされることが多いが、この「何が見えますか？」というシンプルな問いも、子どもたちの反応のしやすさを考えると、機能しているのがよくわかる。収録されている子どもたちのやりとりはリアリティに満ち、私もそこにいたかったと思うほどだ。

読者は本を閉じてすぐさま、子どもたちとどんな作品を見ようかと、画像をネットで探すことになるかもしれない。多様な作品との出会いをまずは先生が楽しんでいただきたい。

（独立行政法人国立美術館　国立アートリサーチセンター　主任研究員　稲庭 彩和子）

アマゾンでも送料無料にて販売中！！

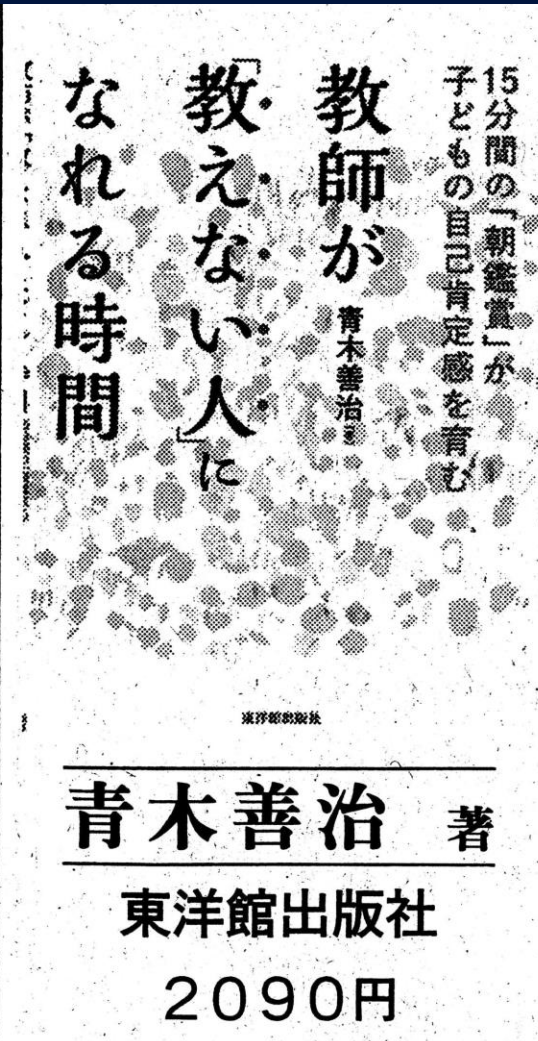
教師が「教えない人」になれる時間
―15分間の「朝鑑賞」が子どもの自己肯定感を育む―

美術作品に対する自分の見方や感じ方、考え方を他者と交流しながら楽しむ対話型鑑賞法「朝鑑賞」を通して、「主体的・対話的で深い学び」を子どもに定着させる方法論を示す解説書。

全4章から構成。第1章は、現在求められている学びに触れ、その上で芸術に触れる必要性を説く。第2章は、朝鑑賞での教師の立ち回り方を紹介。子どもたちのディスカッションを活発にする言葉選びや、その言葉を発するタイミングを説明する。最もページ数を割いている第3章では、朝鑑賞の実例を用いながら具体的に述べていく。教師と子どものやりとりが細かくまとめられた議事録を掲載。事例は学年ごとに記されており、朝鑑賞を実践した際につまずきそうな部分は丁寧にフォローされている。

そして、朝鑑賞を実践した小学校の校長からの感想が載っている第4章も面白い。朝鑑賞導入による手応えが生き生きと述べられており、いかに子どもの成長にプラスに作用しているのかが伝わってくる。朝鑑賞という学び方の可能性を感じざるを得ない。

朝鑑賞は決して美術の知識をもとに作品と向き合う取り組みではない。教師は子どもに何かを教えるのではなく、より良い学びを促すファシリテーターとしての役割が求められる。朝鑑賞をきっかけに、子どもの「主体的・対話的で深い学び」を養うだけでなく、教師としての心構えをアップデートすることも期待できそうだ。



教育新聞　2024年9月30日

「自己肯定感」を高め、「学力向上」にもつながるとっておきの方法があります！！

- 「朝読書」や「朝学習」の時間を活用して学級ごとに「対話型鑑賞（朝鑑賞）」をまずは月に１回程度から実施

- 朝鑑賞の題材は、滋賀県でも採用されている日本文教出版の小学校教師用指導書に付随する「アート・カード」を活用

- 教室のモニター等に映して使用

自己（授業実践）紹介後に説明いたします

第59回大学美術教育学会（宇都宮大会）
2020年9月19・20日

自己肯定感を高め、生き生きと表現する子どもの育成

新潟県三条市立栄北小学校

校長　青木善治

１　はじめに

子どもたち一人一人の自己肯定感を育むために、安心感と居場所のある学級・学校をつくり続けることに特に力を入れている。

そこで、図画工作の表現及び鑑賞の活動を通して、多様な見方や感じ方、考え方を育みやすい教科特性をいかし、その具現化につなげたいと考えた。

表現を楽しむ経験を重ね、教職員や友だち・保護者・地域からお互いの存在を認め合える様々な活動を経験して、子どもの自己肯定感を高めようとした。

２．実践の概要

子どもたちの自己肯定感を高めるために、次の３つの取組を行った

（1）「作家と一緒に作品をつくり認められる経験（作家との連携）～「えっ！からはじめよう。八色の森の美術展」の連携～」

平成 30 年度は作家のイシザワエリ氏との連携による出前授業「プカプカプー」（立体作品）を実施した。全校児童の作品が 2018 年 10 月 7 日～ 11 月 18 日に池田記念美術館に作家作品と一緒に展示され、鑑賞活動も初めて実施した。子どもたちは、自分自身の作品を含め、どの作品にもよさがあることを実感することができた。

2018年

出前授業 「プカプカプー」

出前授業 「プカプカプー」

出前授業 「プカプカプー」

「プカプカプーの鑑賞活動」

◆2年生の感想より

・（中略）電車からおりて歩いて八色の森公園に行く前に、まず、美術館に行きました。中に入ったら、さっそく目の前にだいじに自分のプカプカプーがかざられてて、びっくりしました。（Kさん）

・（中略）池田記念美術館に行って、入ったらいろんな作品があったのでびっくりしました。石打小の友だちに自分の作品を教えてあげました。いっしょにみれてうれしかったです。（Rさん）

※美術館に展示される喜び。見方や感じ方もひろがり、自己肯定感も高めることが容易となる。

翌年の2019年

（1）「作家と一緒に作品をつくり認められる経験（作家との連携）
～「えっ！からはじめよう。八色の森の美術展」の連携～」

令和元年度は作家の佐藤未来氏との連携による「線と色と形のワークショップ」（平面作品）を、子どもたちの様子を伝えた上で、作家と美術館と学校が協議後、協働で実施した。

子どもたちは今までに見たこともない、ありそうもないものを楽しみながらつくりだす造形活動をすることになった。そして、世界に一つしかない素敵な作品とともに、新しい意味や見方や感じ方もつくりだせる、新しい＜私＞をもつくり、つくりかえ、つくり続けていった。

2019年9月4日　線と色と形のワークショップ

（２）「自分の作品が美術館や学校で展示され保護者・地域・友だちから認められる経験と鑑賞活動（美術館との連携）」

子どもたちの作品は池田記念美術館に35名の現代アート作家作品と一緒に展示され、鑑賞も楽しむことができた。
その際、立教大学教授河野哲也氏と連携した「哲学対話」に参加することができ、子どもの自己肯定感を高めることにつながる貴重な機会となった。

平成30年度に引き続き、作家と美術館と学校が連携し、子どもたちの創造性や見方や感じ方、考え方を広げ育む活動を実施することができた。
子どもたちにとって、自分自身の表現を広げ、大きな自信につながる、貴重な経験となった。

2019年10月15日　　３年生　池田記念美術館へ

「美じゅつかん見学の感想」

わたしは行きのバスでさいしょにmさんといっしょにのりました。美じゅつかんについたら、まずはんを決めました。そして、コミュニティボールというボールでてつがくたいわということをしました。あんまりふだん人のまえで話すことがないので、すこしきんちょうしました。

今回の見学以外にもUIこうりゅうで、池田記ねんびじゅつかんに来たことがあったので、２かい目でした。見学はとっても楽しかったです。　（aさん）

「池田記念美術館見学のこと」

10 月 15 日に池田記念美術館見学がありました。みんな一回はきているのですが、ぜんぜん中のてんじ物がちがっていて１・２・３・４・５・６年生の作品がとてもすごかったです。人形のかおや体がとてもこまかくてキレイでした。目がとてもつかれました。何でつかれたかというと作品を見すぎたからです。おみやげをもらいました。銀と金のおりづるです。とてもかわいいし、キレイでした。　（b さん）

池田記念美術館における、「哲学対話による鑑賞」を通して

引率：3年生担任

①子どもたちにとって、美術館に行くことのよさとは

作品に込められた作者の意図を、想像しながら感じられることだと考える。学校では、自分が作品を作り、同じクラスの友だちも作品を作り、それを互いに鑑賞する。場合によっては、友だちに「これは何を表そうとしたのか」と聞くことができる。しかし、美術館での作品鑑賞は、ほとんどの場合は、作者はその場にいない。鑑賞者が、想像しながら考えることになる。それがよさであり、楽しさだと感じた。

②「哲学対話」を通して変容した子どもたちの姿

ある女子児童は、人形を見て「目つきがこわい」と言っていた。しかし、話し合いの中で、人形の服装、題名、どんな場面なのかといくつか話を聞いて、「その目つきは、大切な人を想う、寂しさや悲しさを表しているのかな」という旨の発言をしていた。周りの人と話すことを通して、自分が注目した「目つき」以外の情報を付け足して考えて、改めて「目つき」に対する自分なりの見方をしていたように思う。

深く難しいことは話し合えてなかったように思うが、話し合いを通して、様々な情報を得て、自分なりの新たな見方で見ることはできていたように思う。

うわせき

南魚沼市立上関小学校
学校便り　第13号
平成30年10月12日
校長　青木善治

～　子どもとつくる笑顔の学校　～

10月20日（土）は学習発表会です。お待ちしております！！！

子どもたちが一生懸命取り組んできた学習発表会が近づいてきました。展示作品を含め、各学年で趣向を凝らした発表を多くの皆様にご覧いただくため、子どもたちはがんばっています。学習発表会プログラムと作品の題材名は以下の通りです。

☆開場8:45　　☆発表9:00～11:30終了予定(給食なし　終了後下校です)

① 1年生　開会のことば
② 1年生　劇・合奏・ダンス　『いけいけ！ピカピカ！1ねんせい！』
③ 3年生　劇・歌・ダンス　『すごいぜ！UWASEKI！』
④ 5年生　劇・合奏　『めざせ！お米博士！！』
（休　憩）
⑤ 学校長あいさつ
⑥ 全 校　合唱　『いのちの名前』
⑦ 2年生　劇　『楽しさいっぱい　やさしさいっぱい！
ゴーゴーミラクル２年生』
⑧ 4年生　劇　『コンフィデンスマン』
⑨ 6年生　劇　『ピーターパン～行くぞ新潟ネバーランド～』
⑩ 6年生　閉会のことば

☆作品展示時間・場所　8:45～13:45（1階：理科室前廊下・家庭科室）

題材名　1年生　「うつした　かたちから」
2年生　「見て見て　おはなし」
3年生　「うれしかった　あの気持ち」
4年生　「えっ、名前」
5年生　「じっと見つめていると」
6年生　「この風景　好きだな」

子どもたちの作品展示を１階理科室前の廊下で行いますので、どうぞご覧ください。その際、次の点にご留意しながら作品鑑賞をしていただけましたら幸いです。

絵は、子どもの「世界」です。子どもたちは、子どもの理由で絵を描いています。是非、子どもの視点でみるように心がけてください。そのためには、作品にぐっと近づいて（部分）をみると、わかりやすいです。まさに、その作品をつくっている時の子どもの眼差しになる行為です。すると、作品から「子どもの声」が、より一層聞こえてきます。作品のお薦めの見方は、

1　近づいてみる　　2　描いた順番をたどる　　3　題名を隠して、題名を考えながらみる

例えば、絵の具や線の重なりから、描いた順番がある程度わかります。同じ形の繰り返しから「この形が大好きなの」、何度も描き直した跡から「ここ大変だったんだ」という声が聞こえてきます。また、お子さんと一緒に作品をみていただくこともお薦めです。その際は、「ここをこんな風にしたんだね。ここは苦労したでしょう」などとおしゃべりをします。そして、お子さんの作品をみながら生まれてくる自分の気持ちをそのまま口にします。その時、無理に「褒めよう」とするよりも、「聞く」「うなづく」ように留意します。「ここ、どうしたの？」「そうなんだ」「なるほど」「どんな順番で描いたの？」「そうかあ」等々。自分の価値観をいったん脇において、子どもの目線でとらえていく姿勢がとても大切だと感じています。

是非、子どもたち一人一人の世界（作品）をその作品を描いている子どもたちの気持ちも想像しながら、楽しみながらご覧ください。皆様のお越しを心よりお待ちしております。

池田記念美術館において「八色の森の美術展」が11月18日まで開催中です！

全校の子どもたちの作品が展示されています！１～４年生は作家のイシザワェリさんが講師をされ、サマースクールにおいて作成した『ブカブカブー』。５～６年生は「水の声」をアクリル絵の具を用いて共同でダイナミックに表現しました。現代アート作家の皆さんの作品と共同展示されています。このようにユニークで素敵な展覧会の企画は日本国内でもめったにありません。是非、ご家族で芸術の秋をお楽しみください。

チャレンジ持久走大会が無事に開催されました！

１０月２日（火）快晴のもと、チャレンジ持久走大会を実施することができました。平日の午前中にもかかわらず大勢の皆様から応援に来ていただいて、子どもたちの頑張りをたくさん見ることができた持久走大会でした。

＜各学年の結果＞

保護者の感想より

「以前までは池田記念美術館に親子で行ったこともありませんでしたが、今ではとても入りやすくなりました。これまでは敷居が高くて、作品を鑑賞するときにはある程度の知識が必要で、子どもに何かいいことを言わないといけないと思い込んでいました。ところが、子どもと一緒に作品をみて、『何が描いてあるんだろうね』とか『変だね～』と他愛のない会話でも楽しめるし、それでいいことが分かりました。また、学校でも子どもたちの作品を見るときには、以前までは『この子上手だね』と上手いかどうかという視点でとらえがちでした。ところが、今では『この子はこういう個性なんだね』『こういう見え方もあるんだね』と感じられるようになり、表現はもっと自由でいいんだと思えるようになりました。これは、子育ての時も一緒で、とても生きやすくなったように感じています。ありがとうございました。（保護者）」

鑑賞を通して、作品の見方のみならず、子育てに対する考え方も変容したことがわかる。

対話型鑑賞について

対話型鑑賞とは1980年代半ばに，アメリカのニューヨーク近代美術館で子ども向けに開発された美術の鑑賞法で，英語では VTS（Visual Thinking Strategies ：ビジュアル・シンキング・ストラテジー）

対話型鑑賞が従来の美術鑑賞と異なる点

学芸員等の解説を一方的に聞くだけではない。

作品の意味や技法，作者に関することなど，美術の知識をもとにして作品と向かい合うのではなく，作品をみた時の感想や，そこから想像されることなどをもとにして，グループで話し合いをしながら，その対話を通して鑑賞を楽しむ。

特定の美術についての知識を介さずに作品を楽しむ体験を他者と共有することを通して，自己肯定感を育んだり，想像力や自分で考える力を育てること，自分の考えを話す力や他者の話を聴く力といったコミュニケーションの能力や新しい意味や見方や感じ方を育むことが可能。

３．終わりに

図画工作の表現及び鑑賞活動を通して、子どもたちは思い思いに表現することを楽しみ、現代アート作家、友だち、教職員、保護者や地域など、色々な人から褒められ、認められる経験をすることができた。作品を認められる、すなわち作品を表した作者自身が認められるということである。

その結果、自分自身に対する見方が広がり、自己肯定感が高まった。これらは「楽しかった」「自分の作品をもっと多くの人に見てほしい」といった感想や12月に実施した「子どもアンケート」の結果や子どもたちの笑顔からも感じられた。「自分のことが好き」に対する肯定的な回答は全校平均72.6%から80.1%と7.5ポイント上昇した。子どもに寄り添い、褒めながら認めることによって、より一層自分自身に対する見方も広げ、子どもの自己肯定感をさらに高め、安心感と居心地のよい学校や様々な環境を地域と共につくり続けていきたい。

学校において留意してきたこと

- かつて私も子どもであったのだが、いつの間にか、頭でっかちで既成の概念や価値観で縛られ、年をとるほど大切なものを失ってきているように感じている
- 子どもたちの世界を丁寧にとらえ直していくと、自分自身が子どもや学びをどのようにみているのかを不断に見直すきっかけになっていることに気付く
- すると、子どもたちと共に行為しながら、その行為によって立ち表れる意味や、それをつくりだした行為の意味を教師自身の身体を通して感じ取るようにすることがとても重要だと感じている

「造形遊び」の「学び」

- ただ遊んでいるだけで、何も身に付かないのではないか、、、
- 過程が大切とはわかってはいても、結果のできばえが気になる
- 新しい意味や＜私＞をどのように培っているのか

- 一体、何が、どのように培われているのか、子どもの学びがみえなかった

留意していきたいこと

- 学習活動後にビデオ記録や作文シートなどを見直していくと、その場では感じられなかったことや自分の思い違いに多々気付く
- すると、教師がその場でとらえていることが決して全てではない
- すなわち、子どものことが「わかりかけてきた」「わかってきた」といった安心感みたいなものをもちはじめたときこそ、子どもをとらえる目が鈍りはじめている

子どもを内側から見る

- もちろん、子どもの心や思いを知りたいと願い、外側から無理矢理心の扉を開けることは不可能
- 子どもの心の扉を開く取手は、子どもの内側にしかない
- そのためにも、「その子に対する他の可能性やとらえ方もあるかもしれない」といった緩やかな前提で謙虚にかかわり合うように留意していく

教師の心構え　自己肯定感を育むために

- この様な心構えがあると、一人一人の＜子ども＞に対して共感しやすくなり、より適切な支援を行うことにつながり、子どものよさやリズムや論理をとらえやすくなるように感じている
- さらに、子どもは自分のよさを認められる状況から、安心して笑顔をみせて学びを育み、「自己肯定感」を培いやすい環境になることがわかってきた

気をつけていきたいこと

- 図工に限らず、全ての教科や学習活動において、子どもをあることができるかできないかなどといった一元的な尺度でとらえず、
- 子どもの行為を子どもの「内側からみる」姿勢で、子どもを共感的にとらえ続けていきたい
- 子どもたちにとって、この様な安心できる場や状況が「自己肯定感」を培い、意欲を高め、「学力」のみならず、「学欲向上」につながっていく

シュレッダーからうまれたよ（4年生）

つくる　＜漢字からひらがなへ＞

- そもそも、「作る」という言葉の表層的で狭いイメージを取り除き、ひらかれた＜つくる＞という行為とする意図から、昭和52年度の学習指導要領から「つくる（ひらがな）」と表記する経緯がある

- しかし、今日においても図画工作や美術が本来の意味での人間形成に深くかかわる教育として、認知されているのであろうか

「子ども理解」の大変さ

- この言葉を「大人」に置き換えてみると、その困難さがよくわかる
- 「大人理解」など不可能なのではないだろうか
- しかし、相手が年下の「子ども」であると、つい大人は＜子ども＞を未成熟、未発達な存在ととらえてしまい、
- わかっているような錯覚に陥りがち
- 子どもの作品からみえること

子どもの姿からみえること

最上の褒め言葉は？

- 「あなたの作品をもっとみたいな～」「この作品を玄関に飾ってみたいな～」等、作品を認め、作品を共有しようする姿勢の表現

- 「ほめる」という意識を捨てて、そのまま子どもを感じるように

最上の褒め言葉は？

- 例：「ここ、どうしたの？」
  「なるほどね～」「そうなんだ」「ふ～ん」
- 「どんな順番でつくったの？」
- 「なるほどね。じゃ、ここを描いた後に紙を貼ったんだ」「そうかあ」

- 大人の価値観や概念、常識といったもの・自分をいったん脇において、子どもを感じていく姿勢が大切

「自己肯定感」を高め、「学力向上」にもつながるとっておきの方法があります！！

- 「朝読書」や「朝学習」の時間を活用して学級ごとに「対話型鑑賞（朝鑑賞）」をまずは月に１回程度から実施

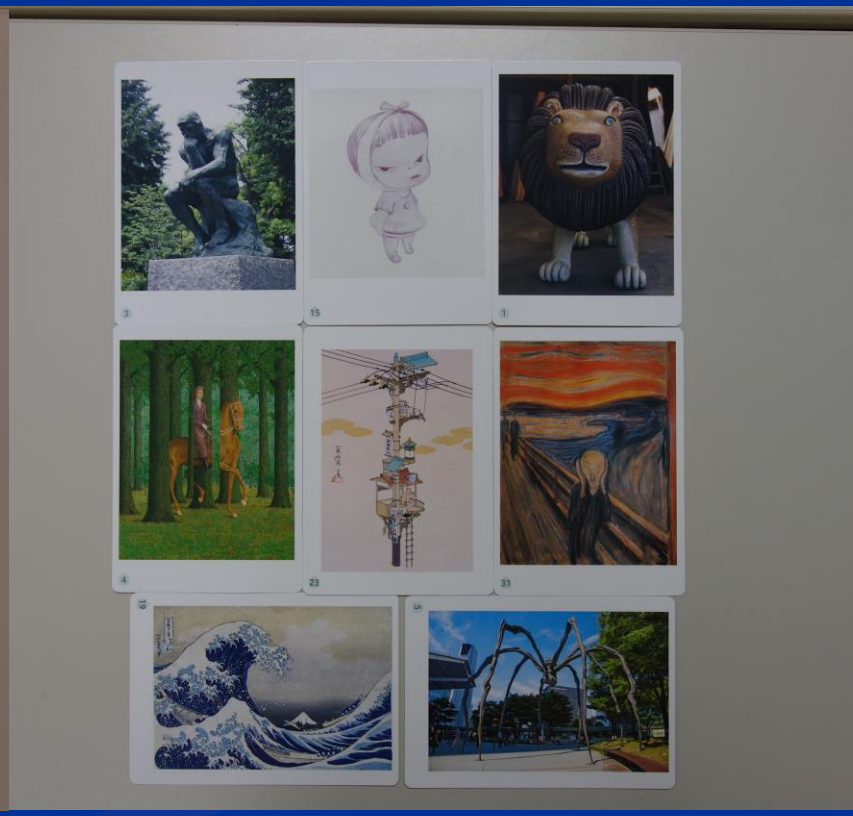
- 朝鑑賞の題材は、滋賀県でも採用されている日本文教出版の小学校教師用指導書に付随する「アート・カード」を活用

- 教室のモニター等に映して使用

朝鑑賞の様子

「自己肯定感」を高め、「学力向上」にもつながるとっておきの方法があります！！

- 日本文教出版の教師用指導書に付随する教材「アート・カード」を活用



19

葛飾北斎［1760-1849］
「冨嶽三十六景 神奈川沖浪裏」

1831-33｜25.3×37.0cm｜多色木版
東京国立博物館［東京都］蔵

Image:TNM Image Archives

この絵は，江戸時代の後半に浮世絵師の葛飾北斎が描いた木版画の作品です。数多く刷られ，外国の美術館にも作品が所蔵されており，作品によって色味が異なります。海外のミュージアムショップでおみやげとしてこの絵に出会うことがあるかもしれません。

北斎は，定規とコンパスのようなものを使うと簡単に絵が描けると言っています。この絵も三角形や円が組み合わされて構図がつくられています。動きのある波とその動きの中心に置かれた富士山。動と静，大と小が対比的に描かれ，遠近感が生み出されています。本当にこんな大波だったら，船はひとたまりもありません。実際の風景をそのままに描くのではなく，ドラマチックに誇張された表現で，形の無い波の一瞬が生き物のように写し取られています。

ポール・セザンヌやフィンセント・ファン・ゴッホなど西洋の芸術家たちは，陰影のない平板で明るい色彩の浮世絵版画を見て驚き，強い影響を受けました。作曲家のクロード・ドビュッシーは仕事場に掲げたこの作品から霊感を受けて交響詩「海」を作曲したと言われています。海外では「グレートウェーブ」と呼ばれ，世界的によく知られた１枚です。

この作品をよく見て……

■何が見えますか。

■季節はいつ頃でしょう。

■どのような音が聞こえてきそうですか。
→自由に連想し，擬音語などで声に出す。

■この舟に乗ってみたいですか。乗ってみたら，どのような感じがするでしょう。
→絵の中の形や色，動き，構成など，そう感じる理由を言う。

■この作品に題名を付けてみましょう。

20

土田麦僊［1887-1936］
「罰」

1908｜154.3×198.8cm｜絹本着色
京都国立近代美術館［京都府］蔵

Photo:The National Museum of Modern Art,Kyoto

木の床の上に３人の子どもが裸足で立っています。右の柱には時間割表がつり下がっており，左の１段高くなった部屋には地球儀や冊子が見えていることから，どうやらこの子たちは学校の廊下に立たされているようです。女の子は罰を受けた辛さ，恥ずかしさに，紺色の前掛けを顔に押し当てて泣き出してしまい，真ん中の男の子は状況をよく飲みこめないまま固まってしまったようにこちらを見，右側の男の子は口をとがらせて女の子をにらんでいます。まるで心の声が聞こえてきそうな，三人三様の態度の描き分けも勿論ですが，子どもたちのフワフワとした柔らかい髪の毛やふっくらとした唇，ゴワゴワとした絣の着物の質感の描写の巧みさも目を引く作品です。

佐渡から京都に出た土田麦僊は最初，鈴木松年門下に入りますが，当時の京都画壇を代表する作家が出品する展覧会を見て画壇の推移を感じ，新しい傾向をもつ作品を発表していた竹内栖鳳門下に転じています。栖鳳は渡欧経験があり，蔵書には多くの西洋絵画の画集がありました。「罰」に登場する子どもたちの描写には，印象派以前の西洋絵画の影響があることが指摘されていますが，やがて麦僊は，印象派以後の同時代の西洋美術に触れ，師・栖鳳よりも更に新しい日本画創造のリーダーとなっていきます。

この作品をよく見て……

■何がかかれていますか。

■どのような場所だと思いますか。
→なぜそう思うのか，理由も考える。

■それぞれ，どのような表情をしていますか。
→一人ひとりの表情に着目し，様子を読み取る。

■それぞれ，どのような気持ちでいるのでしょう。
→一人ひとりの心のつぶやきを，吹き出しカードをつくって書き込む。

■この絵の前後の物語を考えてみましょう。
→自由に想像し，簡単な言葉を添える。

アート・カードを用いた鑑賞活動

1　アート・ゲームは、鑑賞「活動」そのものを楽しみながら思考・判断し、表現することを「学習」させる鑑賞「教育」

活動を楽しむ＝体験活動
話し合いでの確認＝到達目標
ふりかえり＝向上目標

1枚のアート・カードからの活用例
（朝鑑賞）

「自己肯定感」を高め、「学力向上」にもつながるとっておきの方法があります！！

　対話型鑑賞とは1980年代半ばに、アメリカのニューヨーク近代美術館で子ども向けに開発された美術の鑑賞法（VTS）

作品の意味や技法、作者に関することなど、美術の知識をもとにして作品と向かい合うのではなく、作品に対する自分の見方、感じ方や考え方を他者と交流しながら、その対話を通して鑑賞を楽しむ

　この朝鑑賞の最大の特徴は、学力の優劣が大きく関係せず、誰もが平等に参加でき、思考力や表現力を高めていくことができる

　また、先生は「教えない」人になり、そのかわり「問い」を投げかけ、つなげていくファシリテーターとなる

アート思考とは

アーティストは、目にみえる作品を生み出す過程で次の3つのことをしている

①「自分だけのものの見方、考え方」で世界をみつめ

②「自分なりの答え」を生み出し

③それによって「新たな問い」を生み出す

※アート思考とはまさにこうした思考プロセスであり、「自分だけの視点」で物事を見て、「自分なりの答え」をつくりだすための作法。

「アート」とは、上手に絵を描いたり、美しい造形物をつくったり、歴史的な名画の知識・ウンチクを語れるようになったりすることではない。「アート思考」を身に着けることが「美術」という授業の本来の役割

P13より

「自己肯定感」を高め、「学力向上」にもつながるとっておきの方法があります！！

　朝鑑賞中は、子どもは教師から知識を与えられる側、知識を試される側という受け身の存在ではなく、問いに対して主体的に考え、友だちの考えも取り入れながら、他者の考えも取り入れながら、自分で考えた「答え」を組み立てていく能動的な存在となる

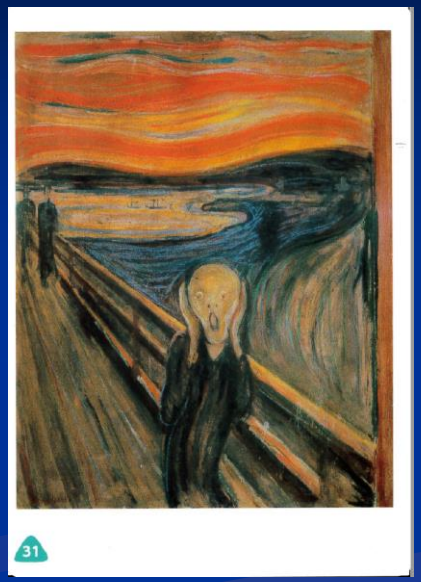
「この作品から、何が見えますか？」
「時間は朝昼晩のいつ頃？」
「季節はいつ頃だと思いますか？」
「どんな声や音が聞こえますか？」
「どんな問いが考えられますか？」

「不思議な点とか疑問点とかありますか？」

「どんな題名をつけますか？」

「どこからそう思いましたか？」等々
様々な投げかけから

「自己肯定感」を高め、「学力向上」にもつながるとっておきの方法があります！！



　対話型鑑賞（朝鑑賞）中、子どもたちは「みる→考える→話す→聴く→みる→考える→話す→聴く」を繰り返していく

　そこには正解もなければ不正解もない

学校はとかく正解や同質性を求める雰囲気が「違い」を受け入れやすい場を確保できる

　この様な活動を繰り返す中で、同じ作品を見ていても、多様な見方や感じ方があり、互いのよさや個性を発揮しやすく、同時に認めやすい環境もつくられていく

　それは、朝鑑賞後の授業においても、意欲的に発言する子どもが増えると同時に、<u>お互いの話をしっかりと聞く姿勢</u>も培われていく

「自己肯定感」を高め、「学力向上」にもつながる

　作品を見て、考えて、確かにそうだと肯定する、受け入れるといった活動を繰り返していく中で、子どもたちは、自他の多様な見方や感じ方、考え方を朝鑑賞を通して培っていきやすいことや

　教師の変容も明らかに

朝鑑賞で身につけたファシリテーションスキルが功を奏す！

　大勢の子どもたちから出てくる意見を巧みに拾い、適切な投げかけをするのはなかなか難しいこと、これを繰り返していくなかで、これまで以上に子どもの声に耳を傾けるようになり、授業では子どもが考えをめぐらすことを待てるように

是非、試してみませんか

教師からファシリテーターになることの意味

・教える人から、引き出し、つなげる人へ　→　子どもがより主体的に

＜朝鑑賞の場合＞

正解も不正解もない活動→評価する人、される人の関係ではなくなる

・教師が子どもをありのままにとらえやすくなる

なぜなら

私たちはそれぞれ価値観というゴムの物差しをもっているが

目盛りの幅はそれぞれの人生で違う　ところが　いわゆる

神様、仏様の物差しには目盛りがない

すなわち、はかれない、はからない！

存在しているだけで素晴らしい価値がある！

朝鑑賞の場は、この物差しに近づきやすくなれる時間・

空間になり、子どもの見方や感じ方や考え方に

素直にふれやすくなる時間

教師から学師へ　教室から学室へ

言葉による弊害・思い込み・本質が見えにくくなる一例

例：問題行動（大人からみた価値観）→その子ども自身が困っている行動

相手を変えたければ大人が変わればよいのだが・教室の状況は鏡と同じ

・教える人から、学ぶ人へ　→　子どもがより主体的に

子どもの学びをプロデュースする人へ

教師　→　学師へ

学校・教室　→　学校・学室へ　　意識改革を！

当たり前のことを捉え直す

朝鑑賞の場は、子どもが主体的に学ぶ場に

＜対話型鑑賞（朝鑑賞）の終わり方＞　一例：

「 皆さんと一緒に 鑑賞をすると 、私が考えもつかないような、いろいろな見方や感じ方や考え方を知ることができてとても楽しかったです。本当に皆さんはすごいですね。また次回も楽しみにしています。」

子どもたちにとって必要なこと

子どもが成長してくるためには、自分がやってみようかなと思いついたことは、なんでもやってみていい、なにをしても受け止められる、はげまされる「場」が必要だ。おじけたら、表現、というより その前提である表出が死ぬ。表現が培われる土壌がいるのだ。それは、学校ならば 教員が、全力でつくりだし、支えねばならない「場」である。

よく子どもは「ほめて」育てねばという言い方を聞くが、ほんとに子どもに必要なのは、ほめことばではない。見るものがほんとに感動することだ。つくり出した子どもには見えない、あるすばらしさ、いのち、リズム、それに気づいて感嘆することだ。それへ向かって常に身構え、見落とすまいと、目を耳を触覚をたっぷりと広げて子どもに向かっていること。これが「場」を支えるということだろう。**すてきなことを発見した心のふるえだけが子どもを信頼させる。**

竹内敏晴『思想する「からだ」』晶文社

子どもたちにとって必要なこと

第二は、表現するということは、秘密をもつことと一組になっているということだ。自分の内に、人には言えない大切なもの、あるいは見せたくないものがあることに気づくことこそ、表現が成長してゆく基盤なのであって、すべて心の動きを外へむき出しにすることが表現だと思いこんでいるらしい教員を見かけることがあるが、それは、すぐ外へ見せてもいいように整えられているパターンに子どもを追い込むことにすぎない。（以下略）

竹内敏晴『思想する「からだ」』晶文社より

図画工作科なら「はっきりと言葉にできない感じ」「なんとなく～な感じ」などといった曖昧さも大切にすることができる。また、図画工作科はそんな曖昧な思いを抱きながら考えることができ、不正解がないということは、ある意味すべてが正解にもなりうる教科と考える

提供したい教室空間について

　メアリー・ゴードンは言う。そこでは正しい答えを言ったとか、間違ったとかいうことを各人がそれほど気にしなくなるからだ。競争のない場所では、恥をかくことを恐れずに子どもたちが物を言えるようになる。だからこそ子どもたちは話し合いに積極的に参加し、自分の意見を言うことができるようになるのだ。ルーツ・オブ・エンパシーの授業の後に難しい教科の授業を入れると子どもたちの理解力が上がるというのも、おそらくこの自分から参加する姿勢が続くからだろう。子どもたちが自分で物を考えなくなったとか、自分の意見を言えなくなったとかいう前に、我々大人たちは、彼らが進んで何かを言う気になるアナーキーでエンパシーある空間を提供しているかどうかを考えてみなければならない。

しかし、現代の学校では、試験や進学のための知識が重視され、エンパシーのようなものは「ソフト・スキル」として軽視される。

ブレイディみかこ、2021年

『他者の靴を履く　アナーキック・エンパシーのすすめ』文藝春秋　p290

朝鑑賞から見取った子どもの姿

1. のびのびと楽しそうに発言している

子どもが楽しそうに生き生きと発言しているという感想が、もっとも多く寄せられた。普段はあまり発言しない子も、朝鑑賞の場では発言への抵抗が少なくなるようである。

正解・不正解がないという点で、どの子も発言しやすい場ができるのが朝鑑賞の大きな魅力。中には、「正解がない」からこそ戸惑う子もいるようであるが、回数を重ねる中で変化していった。

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.111-1116より

朝鑑賞から見取った子どもの姿

アンケートの回答から

・何を話してもいいという気持ちがあるので、自分から手を挙げる子が増えた。（１年担任）
・あまり授業に参加できない児童からの発言もあり、全員の視線がモニターに向いている。（2年担任）
・普段挙手しづらい児童も発言できていた。相手の想いを聞いて、「ああ～」「ほんまや」と素直なうなずきが多くみられた。（1年担任）
・子どもたちが意欲的に発表していた。自分の意見がまわりに認められる心地よさを味わえたのだと思う。（３年担任）
・話をすることが苦手な子も多いが、朝鑑賞の自由な雰囲気の中では、思いついたことを楽しそうに話している。（特別支援学級）
・発表をしない子もいるが、ほかの子の意見を楽しそうに聞いているので、それはそれでよいかなと思う。（4年担任）
・「次もやりたい」「もうちょっと続けたい」という声が上がり、子どもたちは毎回楽しみにしている。（4年担任）
・普段、発表が苦手でかたまっている子も、朝鑑賞では生き生きとしている。一日の始まりを気分よくスタートできる。（３年担任）

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.111-116より

朝鑑賞から見取った子どもの姿

アンケートの回答から

・疲れた様子だった子どもたちが、朝鑑賞を通して活気を取り戻している場面もあった。発表に対して、「たしかに！」「ほんまや！」と自然と出る声がクラスをよい雰囲気にさせてくれる。（3年担任）
・とにかく子どもたちの表情が生き生きとしている。会話のキャッチボールができているし、何より子どもの発想がおもしろい！（特別支援学級）
・正解・不正解がないということに安心を感じている様子。友達の発言にうなずいたり、自分の発言に「なるほど」と言ってもらえたりすることを楽しんでいる。（2年担任）
・6年生の子どもたちは「間違ってはいけない」という固定観念が強く、答えがないものに対して発言しない傾向にある。そのため、１回目はあまり手が挙がらず意見を言わなかった。続けていくことで、効果をみていきたい。（6年担任）
・他教科でも「間違っているかもしれないけど」「たぶん」という前置きをしながら、自信はなくてもとにかく発言してみようという雰囲気が広がっている。（5年担任）

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.111-116より

朝鑑賞から見取った子どもの姿

２．いろいろな見方や感じ方があることを実感できる

　朝鑑賞を通して、人によっていろいろな見方や考え方があるということ、そしてそれを互いに尊重することが大切であるということを自然と感じ取っていくことができる。多面的に考え、多様性を受け入れようとしている姿を見取ることができたという意見も多く寄せられた。

朝鑑賞から見取った子どもの姿

アンケートの回答から

・友達の気付きを聞くことで自分とは違う感性に触れられ、毎回楽しそうに過ごしていた。（１年担任）
・朝？昼？夜？と聞いたら、全部（朝、昼、夜）と答える子がいて、一枚の絵に一日の流れを感じているのだと思った。いろいろな見方や感じ方があるのだと私自身も学んだ。（１年担任）
・友達の新しい見方を知り、「なるほど」と納得している様子だった。どの意見も「そうかもしれないよね」と肯定できるので、とてもよい雰囲気。（4年担任）
・「この人物はどんなことを考えているのでしょうか？」などの投げかけは、相手の表情から気持ちを想像することを促すので、とても大切なことだと思う。（２年担任）
・題名を子どもたちに決めてもらうと、想像のつかない題名がたくさん出てきておもしろい。

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.111-116より

朝鑑賞から見取った子どもの姿

アンケートの回答から

３　どんな意見も受け入れられる安心感のある学級になる

人によっていろいろな見方や考え方があることを知り、互いに尊重する態度が醸成されていくと、思いやりにあふれたあたたかな学級になっていく。学級づくりにおいても、朝鑑賞がプラスに働いていることを実感しているという意見が多く寄せられた。

朝鑑賞から見取った子どもの姿

アンケートの回答から

３　どんな意見も受け入れられる安心感のある学級になる

・人によって見方がこんなに違うのだということを、子どもたちは実感できたと思う。どんな意見も受け入れられる安心できる学級になるのではないかと思う。（5年担任）
・幅広いものの見方ができるようになること、そのことを安心して伝えることができる雰囲気づくり、受け入れてもらえたという安心感、学級の素地づくりに大いにプラスになるなと感じている。（教務主任）
・多様な考えや思いを引き出す場として素晴らしい時間だと思う。発表後に聞こえる「あーなるほど」「確かに～」という言葉は、安心できる学級風土の醸成につながるだろう。（教務主任）
・いろいろな気持ちや考え方に共感する力を身につけられたと思う。（特別支援学級）

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.111-116より

教師の気づきや成長

アンケートの回答から

アンケートの回答からは、教師自身の気付きや成長に関する言及も多くみられた。朝鑑賞は、教師にとっても大きな学びと喜びを得ることのできる活動だということがわかる。

（1）子どもを理解するための助けになる

子どもを理解することにつながったという意見が多くあった。朝鑑賞では、普段はあまり発言しない子の言葉を聞くこともできるので、意外な一面を知ったり、一人一人の子どものよさを感じ取ったりすることができる。それは、教師にとって大きな喜びとなる。

教師の気づきや成長

アンケートの回答から

・子どもたちの様々な感じ方を知ることができて楽しい。（1年担任）
・子どもたちのものの見方や感じ方、考え方から自分自身も学ぶことができた。（6年担任）
・普段は挙手をしない子が発表したり、「この子からこんな発言が！！」という意外な場面があったりして、発見と驚きの時間だった。また、私自身も子どもの発言を聞いて、とても勉強になった。（2年担任）
・朝鑑賞の時間は、ほとんどの意見が受け入れられる雰囲気があるので、授業中にあまり発言しない子が発表することがあり、意外な面を発見することができた。（1年担任）

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」東洋館出版社、2024年、pp.111-116より

教師の気づきや成長

アンケートの回答から

（2）教師自身の学びになる

より充実した対話の場をつくるためには、ファシリテーターの役割は重要である。そして、朝鑑賞でファシリテーター役を務めることは、教師自身の力量を高めることにもつながる。なぜなら、子どもの思いや考えを読み取りながら、一人一人のよさを伸ばしていくような支援をすることは、朝鑑賞以外に限らず、学校生活を通して教師に求められる役割といえるからである。

アンケートには、そのような力量形成に役立ったという意見も寄せられた。

教師の気づきや成長

アンケートの回答から

・最初はどうつなげたらよいかがわからなかったが、やっているうちにファシリテートの方法が少しわかってきた。（５年担任）

・子どもたちは、頭に浮かんだイメージを伝えることが上手になってきたように感じる。教師側は、どのような発問で、子どもにイメージをもたせるのかを考える訓練になる。（特別支援学級）

・月に一回のペースなので、自尊感情を高めることにつながっているかどうかということはまだ判断しがたい。回数を重ねていくことでどう変化していくか、注意深く見取っていきたい。（4年担任）

・子どもの発言を常に意識するように心がけている。（6年担任）

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.111-116より

まとめ

アンケートを実施した学校では、先生方の負担感を考慮し、月１回というペースで朝鑑賞を全校一斉にスタートした。毎週実施している朝読書の時間の内、月に１回を朝鑑賞に活用している。月に２～３回できたら理想的だが、無理をすると長続きしない。月に１～２回でも、継続してこのような場を確保し続けていくことが大切だと考える。

寄せられた感想からは、教師が子どもに教えるのではなく、子どもから教師が学ぶ姿勢を読み取ることができる。すなわち、朝鑑賞の子どもの姿を通じて、教師自らの「子ども」観や「学び」観に変容が生じていることがわかる。

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.111-116より

学校運営の視点から ①

彦根市立平田小学校　加藤洋一校長先生

朝鑑賞のウェルビーイングな効果

「作品について感じ、考えたことを、発言したり聞いたりすると、なんだかいい気持ちになっていく」、私自身が実際に対話型鑑賞を経験してみて感じたことである。

児童生徒の自尊感情を高めたいと願う学校は多いだろう。私も赴任した学校ごとに取り組みを工夫してきた。しかし自尊感情と学力はセットで低い場合が多く、決め手に欠いた。そんな中、青木善治先生との出会いで感じるものがあり、すぐに校内研修を実施して実際に自分が体験してみると、上記のような感覚が私の中に残り、その効果に確信を得たことを覚えている。

善は急げ、とばかり、２学期から月1回15分の朝鑑賞を導入したが混乱はなかった。彦根市立平田小学校では現在もこの取り組みを継続している。

朝鑑賞では、自由に感じ、平等に発表し合い、聴き合う時間が生まれている。一つの作品を学級みんなで観察し、見つけたことや考えたことを発表し合い聴き合うことが、こんなに気持ちのよい空間を作り出すということは、導入してみて初めてわかったことである。

先述の職員研修の話に戻る。令和３年の夏休み、青木先生を招聘し職員研修を行った際、私自身が対話型鑑賞を楽しめた。照れながら発表したら教職員が好意的に反応してくれてうれしくなり、しばらく気分がよかったことをおぼえている（単純）。私だけでなく各教員が手応えを得ていたと思う。朝鑑賞で「自尊感情」「学習意欲」の育成の効果が期待できそうだと感じた瞬間であろう。

学校運営の視点から ①

朝鑑賞のウェルビーイングな効果　彦根市立平田小学校　加藤洋一校長先生

同時に私は教員の育成も意識してきた。朝鑑賞を実践する際には、「聴く力」「つなぐ力」が必須になるため、教員の授業力向上にもつながるだろう。まさにファシリテーション力である。そして、朝鑑賞において教師は教えない存在になるため、美術的素養は必要ない。準備や教材研究等の負担があまりない点も、働き方改革の時代に魅力であった。

教育は様々な取り組みが有機的に働いて時間をかけて熟成し、子どもたちの成長に寄与していくものであろう。ささやかな取り組みであるが、受容し合える素敵な人間関係は、子どもたちに大切なものを生み出していくと思う。これからも成長を見守っていきたい。

令和5年8月25日

令和2・3年度彦根市立平田小学校校長
加藤　洋一

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.126-127より

学校運営の視点から ②

自己肯定感につながる「朝鑑賞」の魅力について

本校では、一昨年度の９月から朝の学習の時間を使って、月に１回朝鑑賞に取り組んでいる。私自身は昨年度に赴任し、この活動を通して子どもたちの自己肯定感が高まるよう、継続して取り組んでいる。

朝鑑賞では、「間違いはない」という安心感からか、みんなの前に出て、作品を指さしながら自分の思いや考えを伝えている。それを聞いている子どもたちからは、「へぇ～、ほんとうや！」「そうみえる、みえる」「すごいなぁ」などの声が上がり、お互いに気持ちや思いを交流することができている。

また、教員はすべてが美術の専門家ではないが、子どもたちと一緒になって作品を鑑賞し、共に考え、発見し、共感している姿がよい。導入から１年経った昨年度の夏休み、青木教授を講師に迎えて研修の場をもった。「朝鑑賞とは何か」「いかに子どもたちに投げかけるとよいか」「どのように言葉を返すとよいか」など、改めて研修することで、各教員が自信をもって朝鑑賞に取り組むことができるようになったと感じる。さらに、作品をモニターに映し出し、教員がタブレットの機能を活用して、一部分をぐっと拡大することで、細かな気付きをみんなで確認するなど、教員も工夫しながら技量を高めている。

月１回の取り組みではあるが、朝鑑賞を通して、子どもたちが作品を楽しみつつ、自分の感じたままに伝え、それをまわりの子どもたちに認めてもらえるということが、自己肯定感につながっているのではないかと感じている。

今後も、子どもたちがお互いに認め合い、尊重できる学級集団づくりに向けて、この取り組みを継続して進めていきたい。

令和5年8月30日

令和４・５年度彦根市立平田小学校校長　宮﨑良雄

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.127-1281より

学校運営の視点から ③

朝鑑賞の取り組みを通して

対話型鑑賞を朝の時間に取り入れるという取り組みについて、担任の先生方の受け止めにそれほど抵抗感は感じられなかった。令和4年度の２学期から導入するにあたり、夏季休業中に青木先生の研修会を本校で開催していただいたことも、安心感につながった。

最初の鑑賞は、学年ごとに同じ題材を扱うこととした。初回は、子どもたちも先生方も初めての体験で、やや緊張した雰囲気でスタートしたが、先生の「何がみえますか？」の問いかけに、普段発言の少ない児童が気づいたことを発表してくれると、他の児童もいろいろと気づいたことを発表し始めた。前に出て発表しづらそうな児童も、先生の励ましにより前に出て、指示棒で指し示しながら得意げに発表することができた。

回を重ねるうちに、子どもたちも慣れてきて、どんどん気づいたことを発表するようになった。しかし、前に出て発表となると、ためらう児童もいるので、その子らが内面で考えたことを、表現し合う方法を模索中である。

また、担任はよき理解者でありすぎて、子どもの思考や表現を代弁してしまう傾向がある。これからは、学びのファシリテーターとしての役割が重視されている。対話型鑑賞は、子どもの「気づき」や「伝えたいこと」を、教員が引き出したりつないだりするファシリテーション力を培っていける場である。

子どもの気づきや共感し合う態度を、子どもの声をつなげ学び合いを高める教員の指導力を、これからも対話型鑑賞で培っていきたい。

彦根市立高宮小学校校長　久保田　篤

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、p129より

学校運営の視点から ④

教師も子どもも「答えのない自由な世界」を味わうことができる朝鑑賞

本校では令和４年度より、青木教授と連携しながら朝鑑賞に取り組んでいる。
朝鑑賞を実施する中で、まず感じたのは、教師も子どもも「答えのない自由な世界」を味わうことができるということである。子どもたち一人一人が口々に言葉を発し、お互いの考えを聞き、「そういう考え方もあるよね」と他者の考えを肯定する。そして、自分の考えと他者の考えを擦り合わせ、新たな考え方を生み出していく。
この取り組みを通して、他者を理解するには対話が最も重要であることが見えてくる。対話を繰り返す中で、子どもたちは多様性に気づき、他者を理解していく。朝鑑賞では「答え」は自由で、それぞれが感じた思いを出し合うことで、コミュニケーションが高まり、自己肯定感が育成されていく。
学習指導要領の目指す資質・能力をはじめ、米原市が目指す「子どもたちが自分でつかむ自分の未来」の実現に向けて、朝鑑賞の取り組みを引き続き実践していきたい。

令和5年8月７日

令和5年度米原市立米原小学校校長　億田明彦

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、p130より

対話型鑑賞の７つのポイント

- 　互いの考えや意見を尊重しながら自分自身の思考を深めていくために、大切にしたいポイント。
- ファシリテーターはもちろんのこと、必要に応じて参加者にも伝え、理解を促していく。

- ① １分間ほど静かに作品を見る（朝鑑賞では30秒程度）
- ② 質問を投げてから、10 秒は待つ
- ③ 否定する言葉を使わない（「それは違う」などはNG）
- ④ オウム返しや言い換えをする（「〇〇ということですね」など）
- ⑤ 具体化する（「作品のどこからそう思いましたか」など）
- ⑥ 事実と意見を分ける
- ⑦ 題名にも着目する（例えば、題名を隠しておく工夫も効果的）

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.31-34より

ファシリテーターによる投げかけ

- VTSでは、主に次の投げかけをする

- ①この作品の中で、どんな出来事が起きているでしょうか？
  - ②作品のどこからそう思いましたか？
  - ③もっと発見はありますか？

  - しかし、実際に子どもを対象とした朝鑑賞を続けていく中で、次のような投げかけが効果的だということが明らかになった

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.31-34より

ファシリテーターによる投げかけ

【投げかけの例】

- 「何が見えますか？」
- 「時間はいつ頃だと思いますか？」
- 「季節はいつ頃だと思いますか？」
- 「どんな声や音が聞こえますか？」
- 「この絵をみて、どんな気持ちがしますか？」
- 「あなたなら、この作品にどんな題名をつけますか？」
- 「絵の中の人物と同じポーズをしてみましょう」
- 「近づいて（離れて）みてみましょう」

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.31-34より

ファシリテーターによる投げかけ
留意点

　時間や季節、声や音などを問うことで、鑑賞者の考えをより具体化していくことができる

　また、鑑賞者がそれに答えた際に、「なぜそのように考えたのですか？」と抽象的に理由を問うよりも、
「作品のどこからそう思いましたか？」と問うことで、より具体化していくことができるため、他の鑑賞者と思いを共有しやすくなる

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.31-34より

こんなときどうする？　朝鑑賞のお悩みQ＆A

Q3　発言をしている子が限られていることが気になります。発言していない子まで、豊かな発想ができているか判断ができません。意図的に指名をするべきでしょうか？

Q3たとえ挙手していなくても、「この子は何か言いたいことがありそうだな」「何か感じ取っていそうだな」と表情から読み取れるようであれば、指名してみてはいかがでしょうか。

「何がみえますか」という投げかけは、みえているものを述べればいいので、どの子も発言しやすいと思われます。もし答えられなかったら、「また後で考えがまとまったら教えてくださいね」と伝えてみてください。答えられなかったことを本人が引け目に感じることのないようにしたいです。

ただし、一番大切なことは子どもが「発言する」ことではなく、子どもが「思考する」ことです。友達の発言を聞いているようであれば、それを受けて、発言していない子も思考しているはずです。表面的なことだけではなく、表情などから子どもたちの内面（思考）を常に捉えるようにしていきましょう。友達の発言をしっかりと聞くこと（傾聴）の方が、実はとてもとても難しいことなのです。

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」
東洋館出版社、2024年、pp.117-123より

こんなときどうする？　朝鑑賞のお悩みQ＆A

Q9　最後にどのように終わればよいのかがわかりません。落としどころや締めくくり方が難しいです。

A9　対話型鑑賞には、正解・不正解がないので、他教科のように結論をまとめる必要はありません。どんな言葉で締めてもよいですが、私が実践していた際には次のような言葉でお開きにしていました。「みなさんと一緒に作品をみると、私が考えもつかないような、いろいろな見方や感じ方、考え方を知ることができて、とても楽しかったです。本当にみなさんはすごいですね。また次回も楽しみにしています」

青木善治「教師が『教えない人』になれる時間　15分間の『朝鑑賞』が子どもの自己肯定感を育む」東洋館出版社、2024年、pp.117-123より

「朝鑑賞」の先行研究・実施状況について

「対話型鑑賞」を「朝鑑賞」として先行研究したのは，三澤（2018）宮本・奥村・東良・一條（2020）

三澤の「旅するムサビプロジェクト」から派生 した「朝鑑賞」が所沢市立三ケ島中学校に提案・実施さ れることとなり，その成果や学力分析をルーブリック及び質問紙を用いて奥村らが示し，資質・能力も向上した という量的研究成果がある

また，沼田（2018）が中学校校長として「朝鑑賞」を土台とした授業改善・学校改革に関する効果について 記した研究報告がある
ただし，当時は小学生を対象とした小 学校における「朝鑑賞」の研究は，持続可能で適切な題材開発をはじめ、全国的にはほとんど実施されていない状況

▪ 三澤一実（2018）「『朝鑑賞』の取り組みと成果報告」 日本美術教育研究論集，「日本教育美術連合」第 51 号，pp287-294 11

・宮本友弘・奥村高明・東良雅人・一條彰子（2020）「中学校における美術鑑賞学習の自己評価尺度の開 発ー資質・能力の三つの柱の観点からー」「東北大 学 高 度 教 養 教 育・ 学 生 支 援 機 構 紀 要 第 6 巻 」， pp45-49 12

・沼田芳行（2018）「未来を拓く学校づくり朝鑑賞を 土台としたチームミカジマの挑戦」第 34 回東書教育賞受賞論文，東京書籍，pp.18-27，

米原小 美術作品を「朝鑑賞」

正解ない問い考え発表
児童の自己肯定感育む

米原市の米原小学校が月に1度、授業が始まる前の朝の10分間に、児童が美術作品を見て感想を言い合う「朝鑑賞」を取り入れている。滋賀大の青木薫治教授が提唱している手法で、2022年度に導入した。正解のない問いに対して自ら考えて発表し、教師やクラスメートに受け入れてもらうことで、児童の主体性や自己肯定感の向上につながると期待されている。（形田怜央菜）

問いかけの例
- 何が見えますか？
- どんな声や音が聞こえますか？
- 絵の中の人物は何を考えていると思いますか？
- この作品にどんな題名を付けますか？
- 季節はいつ頃だと思いますか？
- 絵の中の人物と同じポーズをしてみましょう

14日にあった朝鑑賞。2年生のあるクラスの題材は、丸い物体から水蒸気のようなものが出ているように見える画像だった。「これに名前を付けてみるなら？」。教員が問いかけると、児童から「泡で膨らむ水風船」「四分音符から出るシャンプー」などと答えが次々と飛び出した。

磯密ねねさん(7)は「考えるのはちょっと難しいけど、みんないろんな想像があってすごいと思った」と目を輝かせた。

題材となる作品を見ながら、自分の考えたことを言い合う児童ら＝いずれも米原市の米原小で

朝鑑賞は、美術の知識を介さずに、見る人同士で対話し、観察力や思考力を深める鑑賞手法の一つ。美術教材や街中にある看板などから題材を決め、その作品をモニターなどで拡大表示し、子どもたちと対話しながら鑑賞する。忙しい学校運営の中でも気軽に取り入れられるよう、朝の時間の活用を促している。

教員は「教える人」の役割を離れ、発言者の思考を促す「ファシリテーター」の立場が求められる。子どもたちが発言しやすいよう「どんな音が聞こえますか？」「（絵の中の人は）何を考えていそうですか？」と具体的に問いかけ、回答に対しては否定の言葉を使わない。

米原小の億田明彦校長は「正解がないので子どもたちが自信を持って発言できるし、それを周りが認めることで子どもの自信につながる」と話す。

視察に訪れた青木教授は「正解も不正解もない活動。子どもたちの柔軟な発想が引き出され、先生もまた子どもの考え方を知る機会になる」と意義を語る。

滋賀大・青木教授提唱「全国へ広げたい」

青木教授は新潟県内の小学校で長年、教員として働いた。新潟県立近代美術館で勤務していた時、対話型鑑賞の技法を体験し、学校現場でも導入したいと考えたという。21年度に滋賀大に赴任して以降、米原小のほか彦根市内の3校でも朝鑑賞を実践している。

「朝鑑賞を通して子どもたちが自分のことを表現できるようになれば、教室が居心地の良い場所にもなる。滋賀から全国へ取り組みを広げていきたい」と意気込んでいる。

朝鑑賞を提唱している滋賀大の青木教授

びわこ版

ぼくが5年生でがんばりたいことは野球です。

理由は、野球がへただからです。だから自主練もしっかりがんばって、試合で活やくしたいです。

長浜市長浜小5年　髙宮悠右さん

スポーツ記録掲載します

大会名、開催日、会場、代表者の連絡先（電話番号）などを明記して、中日新聞大津支局スポーツ滋賀係へファクス＝077(524)4447＝か、電子メール＝otsu@chunichi.co.jp＝で送ってください。スポーツ大会などの情報も受け付けます。

令和６年度 鳥取県立美術館　美術館プログラム事業

朝鑑賞シンポジウム

第2回

ＺＯＯＭ配信あり

@鳥取県立美術館

開館直前！

参加無料

いま話題の「朝鑑賞」に関するシンポジウムを、今年度は時間を拡大し開催！

週に1回、たった10分の

「朝鑑賞」で、安心・安全な学校づくり

―朝鑑賞の実践について道筋を考える―

「朝鑑賞」に興味をお持ちの方、アートを通じた学びやコミュニケーションに興味をお持ちの方、小・中学校、義務教育学校、高等学校、特別支援学校の先生方、大学等学校教育関係者および学生、市町村教育委員会関係者、対話鑑賞ファシリテーター登録者等にお薦めのシンポジウムです。オンライン聴講も可能ですので、お気軽にご参加ください。

日時

令和７年

２月２３日［日・祝］

１０時▶１６時３０分　【午前の部】１０時 - １２時１５分　【午後の部】１３時３０分 - １６時３０分

全国各地から多彩なパネリストが倉吉に大集結！

会場

鳥取県立美術館ホール　〒６８２ - ０８１６　鳥取県倉吉市駄経寺町２ - ３ - １２

【定員】申込先着順６０名（ＺＯＯＭの定員は３００名まで）／ 令和７年１月２７日［月］より申込受付開始

【午後の部】パネリスト

コーディネーター

三澤 一実（みさわ・かずみ）
武蔵野美術大学 教授

1963年長野県生まれ。公立中学校美術科教諭、埼玉県立近代美術館主査、文教大学准教授を経て、2008年より武蔵野美術大学教授。『旅するムサビ』を主宰し、2017年『旅するムサビ』はグッドデザイン賞受賞。2016年から朝鑑賞に取り組む。

海老塚 耕一（えびづか・こういち）
多摩美術大学 名誉教授
日本美術家連盟 理事

1951年横浜市生まれ。美術家、現代美術研究者。多摩美術大学名誉教授。個展を中心に発表しサンパウロ・ビエンナーレなど国際展にも多数出品する。美術家としての制作を、鑑賞理論としても論理化しつつ、子どもとの交感（あそびじゅつ）を通して独自に展開している。

青木 善治（あおき・よしはる）
滋賀大学教職大学院 教授・博士（学校教育学）

小学校教諭、上越教育大学附属小学校、新潟県立近代美術館、小学校校長を経て2021年より現職。赴任した学校では、朝鑑賞など造形活動を中心に学校経営に取り組む。現在はその魅力を「教師が『教えない人』になれる時間」（東洋館出版）を基に関西の様々な地域で紹介している。

沼田 芳行（ぬまた・よしゆき）
埼玉県所沢市立安松中学校 教諭

彩の国共育研究サークル学びの杜共同代表、元埼玉県公立中学校校長。2016年より学校研究にアートを取り入れたプロジェクトを主宰してきた。中核となる教育活動に「朝鑑賞」を据え、子どもたちのこれからに生きる学びのチカラを育んできた。著書に「校長の挑戦」（教育開発研究所・共著）

星野 優子（ほしの・ゆうこ）
茨城県教育研修センター 指導主事

茨城県公立中学校で美術科教員としての勤務後、茨城県教育研修センターで図画工作・美術科担当指導主事を務める。STEAM教育におけるアートに迫るための一つの方法として朝鑑賞に着目し研修に取り入れ、県内での朝鑑賞普及につなげている。

嘉戸 浩二（かど・こうじ）
鳥取県教育員会事務局 中部教育局 学校教育担当 係長

鳥取県教育委員会事務局中部教育局で学校教育担当係長を務める。県立美術館がある鳥取県中部地区で、所管の市町教育委員会、各学校とともに、教育現場での美術館の活用、美術や図工を通した子どもたちの資質・能力の育成に携わっている。

申込　対面・ZOOMとも裏面のメールフォームよりお申込みください　**主催**　鳥取県立美術館　**共催**　鳥取県教育委員会／美術科教育学会／全国大学造形美術教育教員養成協議会

令和６年度 鳥取県立美術館　美術館プログラム事業

朝鑑賞シンポジウム

第２回

ＺＯＯＭ配信あり

@鳥取県立美術館

開館直前！

参加無料

いま話題の「朝鑑賞」に関するシンポジウムを、今年度は時間を拡大し開催！

週に１回、たった10分の

「朝鑑賞」で、安心・安全な学校づくり

―朝鑑賞の実践について道筋を考える―

「朝鑑賞」に興味をお持ちの方、アートを通じた学びやコミュニケーションに興味をお持ちの方、小・中学校、義務教育学校、高等学校、特別支援学校の先生方、大学等学校教育関係者および学生、市町村教育委員会関係者、対話鑑賞ファシリテーター登録者等にお薦めのシンポジウムです。オンライン聴講も可能ですので、お気軽にご参加ください。

日時　令和７年 **２月２３日［日・祝］**
10時▶16時30分　【午前の部】10時 - 12時15分　【午後の部】13時30分 - 16時30分

全国各地から多彩なパネリストが倉吉に大集結！

会場　**鳥取県立美術館ホール**　〒682 - 0816　鳥取県倉吉市駅経寺町２ - ３ - １２

【定員】申込先着順６０名（ＺＯＯＭの定員は３００名まで）／ 令和７年１月２７日［月］より申込受付開始

【午後の部】パネリスト

コーディネーター
三澤　一実（みさわ・かずみ）
武蔵野美術大学　教授

1963年長野県生まれ。公立中学校美術科教諭、埼玉県立近代美術館主査、文教大学准教授を経て、2008年より武蔵野美術大学教授。「旅するムサビ」を主宰し、2017年「旅するムサビ」はグッドデザイン賞受賞。2016年から朝鑑賞に取り組む。

海老塚　耕一（えびづか・こういち）
多摩美術大学　名誉教授
日本美術家連盟　理事

1951年横浜市生まれ。美術家、現代美術研究者。多摩美術大学名誉教授。個展を中心に発表しサンパウロ・ビエンナーレなど国際展にも多数出品する。美術家としての制作を、鑑賞理論としても論理化しつつ、子どもとの交感（あそびじゅつ）を通して独自に展開している。

青木　善治（あおき・よしはる）
滋賀大学教職大学院　教授・博士（学校教育学）

小学校教諭、上越教育大学附属小学校、新潟県立近代美術館、小学校校長を経て2021年より現職。赴任した学校では、朝鑑賞など造形活動を中心に学校経営に取り組む。現在はその魅力を「教師が『教えない人』になれる時間」（東洋館出版）を基に関西の様々な地域で紹介している。

沼田　芳行（ぬまた・よしゆき）
埼玉県所沢市立安松中学校　教諭

彩の国共育研究サークル学びの杜共同代表、元埼玉県公立中学校校長。2016年より学校研究にアートを取り入れたプロジェクトを主宰してきた。中核となる教育活動に「朝鑑賞」を据え、子どもたちのこれからに生きる学びのチカラを育んできた。著書に「校長の挑戦」（教育開発研究所・共著）

星野　優子（ほしの・ゆうこ）
茨城県教育研修センター　指導主事

茨城県公立中学校で美術科教員としての勤務後、茨城県教育研修センターで図画工作・美術科担当指導主事を務める。STEAM教育におけるアートに迫るための一つの方法として朝鑑賞に着目し研修に取り入れ、県内での朝鑑賞普及につなげている。

嘉戸　浩二（かど・こうじ）
鳥取県教育委員会事務局　中部教育局
学校教育担当　係長

鳥取県教育委員会事務局中部教育局で学校教育担当係長を務める。県立美術館がある鳥取県中部地区で、所管の市町教育委員会、各学校とともに、教育現場での美術館の活用、美術や図工を通した子どもたちの資質・能力の育成に携わっている。

申込　対面・ZOOMとも裏面のメールフォームよりお申込みください　**主催**　鳥取県立美術館　**共催**　鳥取県教育委員会/美術科教育学会/全国大学造形美術教育教員養成協議会

まもなく開館する鳥取県立美術館から、作品鑑賞を通じて新しい自分に出会う「朝鑑賞」の理論と先進的な事例を、昨年よりパワーアップしてご紹介します！

週に１回、朝１０分の「朝鑑賞」が生まれて９年。取り組んだ学校では、学力と自己肯定感が目に見えて向上したことが報告され、その取り組みは、全国へと広がりを見せています。さらにその効果は、教師の指導力向上や保護者との関係性にも表れたといいます。体験する多くの人々の変容が期待できるこの取り組みについて、実践者とパネリストをお招きしてシンポジウムを開催いたします。ご来場の皆様からの声もお聞きしながら「朝鑑賞」についての理解を深めるとともに、ご所属での実践へとつなげる機会とします。

必見・必聴の実践発表を全国に配信！

令和７年３月３０日に開館する県立美術館には、児童・生徒をはじめすべての人たちの「アートを通じた学び」を支援する研究室「アート・ラーニング・ラボ（Ａ．Ｌ．Ｌ．）」を設置し、多様なプログラムを提案することとしています。学校の先生がファシリテーターとなり対話鑑賞を行う「朝鑑賞」もその一つです。今回のシンポジウムでは、全国各地の小中学校・美術館・行政機関からの実践報告と、武蔵野美術大学の三澤一実氏のコーディネートによるパネルディスカッションによって、「朝鑑賞」が学校に何をもたらし、生徒や教師にどのような変化を生むのかについて、理論と実践の両面から迫ります。

【午前の部】発表者

10：00 - 12：15 ／ 開会、実践発表［各回20分程度：発表15分＋質疑応答５分］

実践発表①　10：10 -

埼玉県　上尾市立原市南小学校　教諭　宮河　俊宏（みやかわ・としひろ）
学校課題研究の中で、対話型で進める美術鑑賞「朝鑑賞」に取り組んできました。学級担任による取り組みから、児童がファシリテーターとなった朝鑑賞、朝鑑賞による異学年交流など、これまでの実践を通した児童や職員の変容と今後の可能性について発表させて頂きます。

実践発表②　10：30 -

鹿児島県　奄美市立嶋原中学校小学校　校長　舘　謙治（たたら・けんじ）
調査より、児童生徒の自己肯定感の低さが分かり、職員研修を行う中で様々な取り組みを行ってきました。その中で、武蔵野美術大学三澤教授と知り合い、朝鑑賞を校時表に取り入れました。朝鑑賞を通じて、学力向上や児童生徒の自己肯定感の高まりを感じています。

実践発表③　10：50 -

新潟県　長岡市立上組小学校　教諭　阿部　都美（あべ・いくみ）※オンライン発表
今年、小学３年生で４か月間行った実践について紹介します。体を使い、真似たりポーズをとったりしながら鑑賞できる作品を中心に計10回の朝鑑賞を行いました。互いの見方・考え方を受け入れながら、自分の考えと比べたり関連付けたりし、作品の見方について生き生きと語り合う子供たちの姿が見られました。

休憩　11：10 -

実践発表④　11：15 -

鳥取県　倉吉市立鴨川中学校　校長　中山　歩み（なかやま・あゆみ）
昨年、毎週金曜日の「朝鑑賞」をスタートさせました。多忙化解消に努めなければならない学校の職員へのアプローチを紹介します。また、学力向上のためには、学級力向上も並行して行っていくべきだと考え、本校生徒の課題である表現力の向上も含めた「朝鑑賞」への取り組みの経過をお伝えします。

実践発表⑤　11：35 -

青森県　八戸市美術館　主査兼学芸員　篠原　英里（しのはら・えり）※オンライン発表
八戸市美術館では「アートの学び」を掲げ、学校教育との連携強化に努めています。その一環として、市内小中学校を対象に朝鑑賞の研修を行いました。講師を招いての研修会に加えて、希望校には美術館スタッフが出向き、校内研修を行いました。その事例を紹介します。

実践発表⑥　11：55 -

長野県　東御市企画振興部文化・スポーツ振興課長　高橋　則幸（たかはし・のりゆき）
長野県東御市（とうみし）では、令和５年より市内すべての小・中学校で、朝鑑賞の取り組みがスタートしました。今回は、東御市での実践事例を、実際の記録映像や写真を交えて紹介するとともに、取り組みを始めて２年目の進捗をお伝えします。

休憩　12：15 -

【午後の部】

13：30 - 15：00 ／ 登壇者自己紹介、パネルディスカッション

テーマ　「朝鑑賞」で、安心・安全な学校づくり

武蔵野美術大学教職課程研究室の三澤一実教授が聞き手となり、５名のパネリストとクロストークを行います。登壇者の自己紹介の後に様々な取り組みをご紹介いただきながら、朝鑑賞実践の可能性と課題を考える機会とします。

休憩　15：00 -

15：10 - 16：30 ／ 質疑応答・閉会

校内研究会に全国から２００人！所沢市立三ケ島中学校の「朝鑑賞」

多くの学校では、朝の「朝ドリル」や「朝読書」の他、学校独自の取り組みなど、朝に短時間の学習活動が行われています。「朝鑑賞」はそこで美術作品の鑑賞を行う取り組みです。埼玉県所沢市立三ケ島中学校では、2015年に実施された「旅するムサビプロジェクト（※１）」をきっかけに、2016年度から、週に1回、金曜日の朝10分間、全教科の先生が、全クラスで一斉に美術鑑賞を始める「朝鑑賞」をスタートしました。武蔵野美術大学の三澤一実教授のサポートのもと、沼田芳行校長を中心に学校マネジメントの視点で進められたこの取り組みは、翌2017年に、読売教育賞2017「カリキュラム・学校づくり」部門の優秀賞（※２）を受賞しています。

※１：「旅するムサビプロジェクト」は、学生の作品を学生自身が全国各地の小中学校でギャラリートークする「旅するムサビプロジェクト」、黒板に絵を描く「黒板ジャック」、空き教室を利用した「公開制作」や「ワークショップ」などを三澤一実教授の指導のもとに実施するもの。

※２：1952 年に始まった読売教育賞は、小・中・高、幼稚園、保育所、教育委員会、PTA などを対象に、意欲的な研究や創意あふれる指導を行い、すぐれた業績をあげている教育者や教育団体を顕彰しています。「国語教育部門」「算数・数学教育部門」「外国語・異文化理解部門」「地域社会教育活動部門」などがある。

お申込みは、こちらから

ＺＯＯＭでの聴講をご希望の方には、後日アクセス先のＵＲＬをお申し込みいただいたメールアドレスへお送りいたします。

申込みフォーム

閉会後の18：30 - 20：30（予定）に、講師の皆様との情報交換会を開催します。参加をご希望の方は、お申込みの際にその旨をご入力ください。（会場未定／倉吉駅周辺・要参加費）

※ＺＯＯＭの配信については、様々な環境要因によるフリーズや音声・映像の乱れが生じる場合がありますので予めご了承ください。尚、本会の記録映像を後日公開することも予定しています。詳しくはＷＥＢサイトにて。

鳥取県立美術館 TOTTORI PREFECTURAL MUSEUM OF ART

問合先：鳥取県 地域社会振興部 美術館 （鳥取県立博物館 美術振興課 兼務）
TEL：0857-26-8045 ／ FAX：0857-26-8041 ／ E-mail：hakubutsukan@pref.tottori.lg.jp

鳥取県立美術館のＷＥＢサイトはこちら

Webマガジン

Webマガジン内検索

- まなびと
  - 学び！と美術
  - 学び！と道徳
  - 学び！と道徳2
  - 学び！と人権
  - 学び！と共生社会
  - 学び！とESD
  - 学び！とPBL
  - 学び！と社会
  - 学び！とICT
  - 連載終了
    - 学び！と歴史
    - 学び！とシネマ
    - 旧学び！と美術
- 使ってみよう！ずがこうさくの教科書
- 図画工作科でのICT活用アイデア
- 大橋功先生★美術のチカラ
- 読み物プラス

学び！と美術

前へ　|　一覧　|　次へ

2023.11.10

学び！と美術 <Vol.135>

教室が居心地のよい場となり、子ども同士の関係が変わる　子どもと先生の関係も変わる ～アート・カードを使った朝活動での鑑賞～

滋賀大学教職大学院 教授　青木善治

美術作品などが印刷された「アート・カード」。近年さまざまな美術館で所蔵作品を基につくられ、図画工作科の教師用指導書にも同梱されています（※1）。新潟県で小学校教諭・校長を務め、新潟県立近代美術館での学芸員経験もある滋賀大学の青木善治先生は、朝活動でアート・カードを使った鑑賞活動（朝鑑賞）に取り組み、現在も滋賀県をはじめさまざまな地域で活動を紹介しています。

今回は、青木先生にこうした鑑賞活動の魅力や効果についてお話を伺いました。

具体的に問いかけると、考えやすい

――アート・カードを使った朝鑑賞（※2）とはどのようなものでしょうか？

多くの学校で1時間目の前に朝読書や朝学習と呼ばれる時間を設定していると思いますが、その時間を使ってアート・カードから選んだ作品をみんなで鑑賞するというものです。アート・カードをモニターなどで拡大表示して、子どもたちと対話しながら鑑賞（対話型鑑賞）するという活動ですね。

――美術作品を使った鑑賞というと、美術が専門でない先生方にはハードルが高いように感じるのですが……。

美術作品について教えるのであればそうかもしれませんが、ここでは**対話をしながら、子どもたちが自分の見方や感じ方で考えること自体を重視**していますから、先生がその美術作品について専門的な知識がなくても大丈夫です。むしろない方がいいのかもしれません。

それより**大切なのは子どもたちへの問いかけ**の言葉ですね。作品を見て「どう思いますか？」というような問いは非常に答えにくい。そうではなく「何が見えますか？」「季節はいつだと思いますか？」「どんな音が聞こえますか？」「なんて言っていそうですか？」などというような具体的な問いかけがよいですね。低学年の子どもたちにとっては、「何が見えますか？」が答えやすいです。

そして、例えば子どもが「朝だと思います」と言ったときに、**理由を尋ねることが大切**です。ただこのときも「どうして、なぜそう思ったのですか？」といった質問だと、途端に答えにくくなるのでよくないです。大人でも思わず「なんとなく……」と答えてしまいそうです。ですので、**「作品のどこからそう思ったのですか？」**と尋ねるんです。そうすると答えやすいですし、言葉にできなくても作品を指し示して伝えることもできます。

朝の時間は10～15分程度なので全ての子どもの発言を聞くことはできません。ですので付箋を用意して考えたことを書いてもらって、教室の後ろに貼るようにしてもいいですね。

一人ひとり違うから、みんなが聞きたくなる

――活動の効果はどのようなものなのでしょうか？

作品を見て自由に考えたことには、**何か正解があるわけではなく、一人ひとりの見方や感じ方がある**だけです。その子が実際に感じたことですから、それはだれにも否定できない。つまり、**正解がないということは間違いもない**、ということです。話を聞いていた側の子どもにとっては、同じ作品を見ていたのに自分と違うことを言う子が出てくるから「なんでだ？」となって、理由を聞いて「なるほど！」「そういう見方もできるのか」となるわけです。

自分の言葉が間違いだと否定されずに、みんなに聞いてもらえると、発言した子は自己肯定感を味わえますよね。

ある学校での活動を拝見したときのことです。一人の子が先生から指名されたのですが、自信がなかったのか、みんなに向けて発表できずに隣の子に伝えて、代わりに発表してもらっていました。でも先生は「どこからそう思ったのか教えて」と、発表できなかった子を前に呼んだんです。その子が作品のある部分を指しながら「ここからそう思いました」と伝えると、周りの子どもたちは「あーホンマやー」と声を上げていました。その子はそのまま自分の席に戻っていったんですけど、そのとき、とても嬉しそうに2回「パンパン」と手を叩いていたんです。最初は自信がなかったけど、友だちの反応で受け入れられたと感じたんでしょうね。ほんの短い時間の動きでしたが、その子の自己肯定感が高まった瞬間だったと思います。

実は子どもたちにとって、現状の学校生活には「間違いがなく、正解も不正解もない状況」というのはあまり多くないと思っています。なにかしら「正解」を目指した活動をしています。ですので自分の見方や感じ方を肯定・受容される時間は、貴重なんです。

また、学校では子どもたちに発言を求める場面は多いですが、実は発言するよりも「傾聴する」ことのほうがとても難しいと思うんです。この活動では、「他の子はどういう見方をするんだろう」と、**どんどん気になって、自然と友だちの話を聞きたくなる**んですよね。

これを繰り返していると**多様な見方や考え方があることが当たり前**になってきますし、自分の中での視点も増え、より多角的に物事を見ることもできるようになってくると思います。「〇〇さんの考え面白いな」から「今、私はこう思ったけど、他の考え方もあるかもしれない……」のようになってくるんじゃないでしょうか。

子どもたちに対して謙虚になって、関係を築きやすくなる

――友だちが聞いてくれているという状況が、話をする上での安心感につながる。そういう空間が自然に成立するんですね。一方で先生方にとっても効果があるのでしょうか？

先生方にもたくさんの気付きが生まれると思います。

「普段発言しないので、考えていることがよくわかりにくかった子が、こんなことを考えていたのか」という**子どもへの新たな気付き**、AさんもBさんもみんな違う見方や考え方だという**学級の中の多様性への気付き**、そのうち「ひょっとするとこの子には違う側面があるかもしれない」という**自分の見方の偏りに対する気付き**も生まれてきます。つまり「子ども」「学級経営」「自分自身」に対して**どんどん多面的に見ていくことができるようになります。**

朝活動の時間は、**授業ではないので評価することを意識しなくていい。**ですので先生も、いつもと違う距離感や視点で子どもたちをありのままに見ることができる。そうすると子どもに対する捉え方も変容しやすいですよね。

先生方にとって、子どもたちと接する多くが教科教育の時間です。その中で知らず知らずに自分の物差し（価値観）で子どもたちを測るようになってしまいがちです。でもその物差しの目盛りは先生自身の経験や考えによってゴムのように伸び縮みしていると思います。他人の欠点は大きく見えて、自分の欠点は小さくみえるような。いわば主観的に子どもを見てしまうんですね。それは仕方ないことでもあります。でも、この活動で子どもと関わる中で、**その子の存在自体に価値があることを再認識しやすくなります**。目盛りがなくなっていくんだと思います。その結果、子どもに対して、**自分の捉え方のみが全てではないという謙虚さ**が生まれ、**子どもとの関係を築きやすくなる**んだと思います。

アート・カードの手軽さがいい

――ところで、アート・カードを使うのはなぜでしょうか？

最近は教科書会社の図画工作科の教師用指導書のセットにアート・カードが同梱されています。アート・カードは、40枚程度で一組です。1回の活動で一つの作品を取り上げるとして、月に1回の実施であれば、一組のアート・カードで3年以上活動できます。週1回でも1年近くできますよね。**わざわざ作品を探さなくていいのは、先生方にとっては非常に取り組みやすい**と思います。

また、**教師用指導書同梱のアート・カードに付いている解説書には、作品を見る視点も示されています。**ですので、問いかけに迷ったらその言葉を活用すればいい。つまり、教師用指導書のアート・カードを使えばどんな先生方にとっても取り組みやすいと思い、提案しています。実際に、新しく採用されたばかりの先生の学級でも、とても楽しそうに行われていました。

もちろん、美術作品のポスターなどでもよいですし、子どもたちの作品でもいい。ある先生は週に1回行っていたんですが、最近は町の中で見付けた気になるものも写真に撮って子どもたちに見せているそうです。

――なるほど、確かに朝は何かとバタバタしますから、アート・カードであれば手軽ですね。

自分のよさや個性が教師から大切にされていると実感し、友人のよさや個性も大切にするようになる

――今後の展望についてお聞かせください。

滋賀県でお声がけいただいたある学校では、紹介してから3年間、この活動に取り組んでいただいています。その先生方にアンケートを行った際に次のような言葉をいただきました。

- 多様性があってよいという考え方が自然と子どもたちの中に芽生えて、いろいろな見方や考え方があって面白いと話す姿が見られた。
- 正解がなく児童が思ったことを安心して言える時間のおかげで、とてもよい雰囲気で朝のスタートが切れたのでよかった。
- 友だち同士で話し合い考えを聞くことでお互いを知り、温かな雰囲気になった。
- 普段発表しにくい子も手を挙げていた。他の授業でも発表する姿が見られるようになった。
- 考えたことを付箋に書くようにしたところ、意見を言わない子もいろいろと考えていることが分かった。

いずれも、子どもたちの様子が変わった、先生方の子どもたちを見る目が変わった、というような感想だと思います。この先生方のように、**実感していただくのがとても大切**だと思います。

図画工作の学びの意味や価値を伝えたい

そのためにも、図画工作科の学習の意味や価値のようなものをもっと多くの人や先生方に伝えて、まずは興味をもっていただきたいですね。

図画工作科の学習指導要領の「第3　指導計画の作成と内容の取扱い」2（5）は「各活動において、互いのよさや個性などを認め尊重し合うようにすること。」という項目なのですが、学習指導要領解説では以下のように書かれています。

> 一人一人の児童がよさや個性などを生かして活動できるようにし、友人の作品や活動、言動に関心をもつことができるような設定をすることが大切である。児童は、**個人で表現していたとしても、自分と友人との関係の中で行っていることとして自覚している。個性も、周りの友人達との関係性の中で気付くもの**である。友人の作品や活動に目が向くようにしたり、友人との交流の場面を設定したりするなどして、**児童が自分や友人のよさや個性などに気付くようにすることが大切**である。
>
> そして、それを尊重し合うようにするためには、**教師が日頃から一人一人の児童のよさや個性などを認め尊重することが重要である。児童は、自分のよさや個性が教師から大切にされていると実感し、友人のよさや個性も大切にするようになる。よさや個性には違いがあり、どれもが大切にされるべきものなのだ**ということに気付くようにすることが重要である。（※3）（太字編集部）

これは教師にとって、学校教育全般に取り組む中でとても重要な、いわば根底になければならないことですが、このようなことが教科の学習指導要領に書いてあるのはすごいことだと思うんです。なので、全国の**初任者研修をはじめ節目の研修で、「造形遊び」を含め図画工作科の研修や、アート・カードを使った鑑賞に関する研修をしっかりしてほしい**ですね。「造形遊び」もすごいです。そうすることで学級経営、学校経営は大きく変わると思います。

滋賀県（彦根市）と新潟県（南魚沼市）の教育長さんに手紙を書いて、校長会でこの活動を紹介させていただいたこともあります。南魚沼市ではオンラインでさせていただきました。校長先生に魅力を知っていただくことが大切だと考えたからです。こうした働きかけをどんどんしていきたいですね。2024年2月ごろに向けて「朝鑑賞」の魅力に関する出版を進めています。その際は、ぜひ、お手に取ってご覧いただけましたら幸いです。

青木善治（あおき・よしはる）

滋賀大学教職大学院教授・博士（学校教育学）。

小学校教諭、上越教育大学附属小学校、主幹教諭、教頭、新潟県教育庁文化行政課（新潟県立近代美術館）、小学校校長の勤務を経て2021年より現職。

平成19年度文部科学大臣優秀教員表彰、第40・45回教育美術賞佐武賞佳作（2005・2010年）、第60回読売教育賞「美術教育部門」最優秀賞（2011年）、第5回辰野千壽教育賞優秀賞（2012年）、第68回読売教育賞「カリキュラム・学校づくり部門」優秀賞（2019年）などを受賞。

新潟県立近代美術館勤務期間中に、対話を用いた鑑賞やさまざまなアクティビティを取り入れた鑑賞プログラムを行う。校長として赴任した小学校では、アート・カードを使った今回の鑑賞活動など、造形活動を中心に学校経営に取り組む。

※1：現在お使いいただいている弊社「図画工作」教師用指導書にも同梱されており、令和6年度版「図画工作」教師用指導書にも同梱予定です。

※2：朝鑑賞については、「学び！と美術 <Vol.66>『朝鑑賞』で学校改革」もご参照ください。
https://www.nichibun-g.co.jp/data/web-magazine/manabito/art/art066/

※3：学習指導要領（平成29年告示）解説「図画工作編」p117

3/9 水 ◎音とく ひきざん2
プリント一まい
じゅぺん(さんすう)
ちょうじゅうぎが
むかしの人の生かつ
YAMAHA